

【報告】桜蔭会東京支部 2025 年春の公開講演会

「幻の中世都市・鎌倉」

高橋 慎一郎 氏（東京大学 史料編纂所教授）

日時：2025 年 5 月 10 日（土）14：00～

会場：国際交流留学生プラザ 4 階 同窓会共用室&Zoom 配信

【講師紹介】

東京大学大学院修了後、東京大学史料編纂所助手を経て現職。博士（文学）。

専門は日本中世史、特に都市の歴史。

【鎌倉に関する著書、参考文献】

- ① 高橋慎一郎『日本史リブレット 武家の古都、鎌倉』（山川出版社、2005 年）
- ② 高橋慎一郎『中世鎌倉のまちづくり 災害・交通・境界』（吉川弘文館、2019 年）
- ③ 高橋慎一郎『幻想の都 鎌倉 都市としての歴史をたどる』（光文社新書、2022 年）

【はじめに 参考文献の紹介】

③は今回の講演の内容を含んでいます。要約すると、本の帯にある通り「鎌倉は日本人の記憶と想像のなかでつくられた都市だった」ということで、「記憶と想像」が鎌倉の魅力づくりの大きな要素になっていたという話をこれからいたします。

1 不思議な「古都」鎌倉

・観光地鎌倉

鎌倉は、東京から交通の便が良く日帰り観光もできる有名な観光地です。鎌倉市は人口 17 万人くらいの中小規模の都市ですが、訪れる観光客は年間 2000 万人ぐらいで、全国的に見ても日本有数の観光地、とりわけ首都圏では代表的な観光地です。

鎌倉駅前の小町通りは一番賑わう観光地ですが、商店街が出来たのは昭和になってからで、古都らしい要素はありません。人力車も 1980 年代になって登場した観光用です。和食・和菓子・民芸品など、日本の「伝統文化風」の商品はありますが、鎌倉独自の歴史が反映されたものはほとんどありません。鎌倉散歩の魅力の一つである町なかの洋館、お屋敷風の建物なども、古くても明治以降、多くは昭和になってからの建物です。全体的に近代以降のものが多く、古い鎌倉を偲ぶ手がかりは実はないのです。

鎌倉は、なんとなく古都のイメージがありますが、実際目にするものは実はそんなに古くはないということで、不思議な「古都・鎌倉」といえます。

・頼朝と鎌倉幕府のまちというイメージ

鎌倉といえば鎌倉幕府、源頼朝のイメージが非常に強いと思います。鎌倉市の市章のササリンドウは源頼朝の家紋に因んで制定されたということですが、実は家紋であった確証はなく、少なくとも江戸時代には

あった伝承によるものなのです。江戸時代の有名な浮世絵師、歌川國芳（1798-1861）が描いた錦絵「本朝武勇鏡」というシリーズに源頼朝像がありますが、その鎧の胸にササリンドウが描かれており、江戸時代には頼朝の家紋として定着していたことがうかがえます。

さらに鎌倉市内の「源氏山」というところにある「源氏山公園」に頼朝の銅像が設置されていますが、これも近代のものです。実は「源氏山」自体が古い地名ではなく、南北朝時代には「亀谷山」（かめがやつやま）とか「武庫山」（むこやま）でしたが、江戸時代になると「源氏山」という地名になって、それに因んで頼朝の銅像が建てられたということです。

現在の鎌倉は、江戸時代以降の姿をкаろうじて伝えてはいるけれども、まさに頼朝が活躍した鎌倉時代の姿はほとんど残っていないのではないかという状況です。

2 鎌倉はなぜ世界遺産ではないのか

・世界遺産

鎌倉は世界遺産にはなっていません。世界遺産については厳密な規定があり、世界遺産条約に基づいています。世界遺産に認めるかどうかを審査するのが、国際記念物遺跡会議（International Council on Monuments and Sites）、通称イコモスという諮問機関です。国際的な民間の組織で、各国の文化財の専門家で構成されている機関です。最終的にはユネスコの世界遺産委員会で決定されますが、そのための予備審査をするのがイコモスです。

・鎌倉の世界遺産登録への取り組み

出発点は1992年で、国内のユネスコ世界遺産暫定リストに鎌倉を載せてもらいました。京都や奈良は早い時期に世界遺産に登録されましたが、鎌倉では実際に動き始めたのが2007年7月です。『武家の古都・鎌倉』世界遺産一覧表記載推薦書原案作成委員会』が設置され、推薦書原案の作成に着手します。実は私もこの委員会の委員の一人でした。原案作成に時間をかけて、2012年1月に我々が作った推薦書を日本の国からユネスコへ正式に提出してもらいました。それを受けて、この年の9月にはイコモスの委員による現地調査が行われ、「鎌倉は武家の古都」ということを説明しながら実際に鎌倉の町を案内しました。しかし翌2013年4月にイコモスから「不記載」勧告を受け、推薦書を取り下げました。「不記載」勧告というのは、実質不合格という判定です。イコモスで「不記載」勧告を受けた場合は、一旦推薦書を取り下げることによって再チャレンジの権利を確保するという判断をするのが普通です。

・鎌倉の世界遺産落選の原因

鎌倉市が総括した原因のうち、一番大きいのは「イコモスから都市全体を構成資産として評価された結果、武家政権などを示す物的証拠が不足している」ということです。「武家の古都・鎌倉」というコンセプトで世界遺産を目指したのですが、その物的証拠がありません。これは決定的ですね。

二番目の原因は「個々の構成資産と国内外文化財との比較研究に基づく、価値の説明が不足している」こと。つまり、奈良や京都と比較して、鎌倉は何が違うか、です。「武家の古都・鎌倉」というコンセプト

の名称ですが、これはいうまでもなく、鎌倉は武家政権・鎌倉幕府が置かれた政治の中心だったことに因んでいます。ところが京都や奈良、さらには最近世界遺産になった飛鳥などと比較しますと、鎌倉ではその痕跡が極めて薄いのです。「武家の古都」の中心となる幕府、頼朝とその後の将軍の御所の明確な場所が確定しておらず、史跡や公園などのオープンスペースという形で保存されているわけでもありません。現在の鎌倉で鎌倉時代から残っている数少ない遺跡は、若宮大路、大仏、和賀江島です。和賀江島は、今は島の形がほとんど残っていませんが、鎌倉時代に作られた港湾施設です。

つまり、世界遺産登録を目指していた「武家の古都・鎌倉」が落選してしまったのは、現在残っている史跡だけでは武家の古都を充分に知ることができないから、ということに尽きます。

3 中世都市鎌倉の痕跡

それでは中世の鎌倉の姿を知ることは全くできないのかというと、必ずしもそうとは言えないと思います。中世の文字資料や現在も残っている地名、お寺や神社、発掘の成果などによって「幻の中世都市・鎌倉」の姿をある程度は復元することが可能です。以下、具体的に鎌倉時代の鎌倉の姿を探っていきます。

・頼朝の御所の痕跡

伊豆に流されていた頼朝が治承4年（1180）に反平氏の兵を挙げて東国の武士を従えて、「源氏ゆかりの地」である鎌倉へ入りました。頼朝は最初、父の義朝の居館跡に御所を建てようとしたのですが、義朝の菩提を弔うお堂が建てられていたので断念します。そして、現在の鶴岡八幡宮の東に「大倉御所（大倉幕府）」を作ったことがわかっています。しかし、正確な位置は不明のままです。

ただ、鎌倉幕府の公的な歴史書『吾妻鏡』に、御所は「法華堂（頼朝墓所）の下にあった」と記されていることや、「東御門（ひがしみかど）」「西御門（にしみかど）」「南御門（みなみみかど）」という御所の門を示す地名、御所の東西を区切る堀の役割を果たしていたと想像される「西御門川」と「東御門川」、が流れる地形などから、御所のおおよその範囲が想定できます。北は頼朝の墓の真下の東西道路、南は「横



<現在の大倉御所跡>

大路」と呼ばれる鎌倉時代からあった道（通称金沢街道）で区切られる範囲の中に頼朝の御所があったと想定できます。その辺りを発掘すれば頼朝の御所の跡が出てくるだろうと考えられますが、現在この地域は学校や住宅が密集していて発掘できる状態ではありません。「大倉幕府旧跡」と書いてある大正時代の石碑が建っていますが、多分その辺に御所があったのだろうと想像をふくらませることはできます。

・源頼朝の八幡宮創建

頼朝は御所を作った後、隣に鶴岡八幡宮を創建します。鶴岡八幡宮は頼朝が先祖を祀るために、由比ヶ浜から現在地に遷したと『吾妻鏡』には書いてあります。毎年八月には「放生会」と呼ばれる行事があり、流鏝馬の神事があります。「放生会」は文治3年（1187）に頼朝が京都の石清水八幡宮にならって始めた

幕府あげての一大宗教行事でした。ただ流鏑馬は頼朝が独自に取り入れた武家儀礼で、御家人たちが武芸を披露して競い合う、武家の古都らしい行事です。眼前に鎌倉時代の光景が立ち上がる瞬間といえます。鶴岡八幡宮は、明治以前は神仏習合の「鶴岡八幡宮寺」でした。江戸時代、享保期の鶴岡八幡宮の境内の様子をえがいた絵図では、お寺風の塔や鐘楼、薬師堂、経蔵など、仏教的な建物が建っています。しかし、明治時代の神仏分離政策によって取り壊されてしまいました。今の八幡宮の風景は江戸時代とも違いますし、鎌倉時代では、またさらに違う風景だったろうと思います。

・若宮大路の建設

寿永元年（1182）年、頼朝は妻北条政子の安産祈願のため海岸近くから鶴岡八幡宮へ至る参詣道を作りました。これが若宮大路という直線道路です。道路の中央に一段高く築かれた道が「段葛」（だんかずら）



<現在の段葛>

で、今は歩行者用の通路として使われていますが、鎌倉時代には将軍が八幡宮を参詣するときに使った儀礼的な道です。

鎌倉時代の若宮大路の様子が、発掘の成果によってだいぶ分かってきました。それによれば当時の若宮大路の道幅は33.6mあったということで、現在の道幅よりも広い道だったということがわかっています。また道路の両側に幅3メートルの側溝が作られていたことが明らかになりました。

・幻の大寺院、永福寺（ヨウフクジ）

鎌倉時代のことを偲ぶものとして、頼朝が鎌倉に建てた三大寺院（鶴岡八幡宮寺、永福寺、勝長寿院）のひとつ、永福寺の遺構があります。永福寺は頼朝が奥州の藤原氏を滅ぼした後に、戦死者の慰霊のために建てた寺院です。廃寺となり現在は残っていませんが、発掘調査の結果、当時のお堂の配置が明らかになりました。池の周りに、「二階堂」とよばれる大きなお堂とその左右に阿弥陀堂・薬師堂があったことが分かります。二階堂は平泉中尊寺の二階大堂をモデルにしたといわれ、その左手の阿弥陀堂は宇治平等院を模したという説があります。発掘によって分かった伽藍配置を元に、湘南工科大学長澤研究室がコンピューターグラフィックス（CG）で建物とその景色を復元しました。現在は史跡公園として整備されており、往時の広大な伽藍や庭園をしのぶことができます。

・武家屋敷の痕跡

鎌倉駅の近くにある御成（おなり）小学校で大規模な武家屋敷の跡が発掘されました。特に注目されるのは、南北に二つの武家屋敷があったこと、特に北側武家屋敷は非常に立派な建物で、中心となる建物の他に奥座敷と呼ばれるような接待用の建物があり、白砂が敷いてあった庭があったことなどです。北条氏クラスのかかなり有力な御家人の屋敷だったと考えられ、特に奥座敷は大変贅沢な造りになっていて、おそらくは将軍の御成に備えるための迎賓館的な設備だったのではないかと考えております。現在遺構は埋め戻されており、現地に行っても武家屋敷の姿を目にすることはできません。

4 鎌倉の魅力とは

以上のように、鎌倉は、中世の鎌倉の姿をそのまま伝えるものはあまりにも少なく、そのために世界遺産に認定される壁も非常に高いですが、それにもかかわらず、鎌倉は年間 2000 万人の観光客を集めております。それはなぜかという、鎌倉の落ち着いた雰囲気の中で、なんとなく鎌倉時代、頼朝などの人々の活躍を想像することができる、そうした記憶を辿るためのきっかけのようなものが随所にあるから、と言えます。

・新たな歴史物語

すでに江戸時代の頃から「武士の都」という想像の世界が作られていて、鎌倉は歌舞伎の舞台や、浮世絵の題材になったりしております。幕末・明治期に活躍した有名な浮世絵師、月岡芳年（1839-1892）の筆による、三代將軍実朝が八幡宮の大銀杏に隠れていた甥の公暁に暗殺される場面の歴史浮世絵があります。しかしそれは江戸時代になって登場する新しい歴史物語です。それが伝承され、大銀杏の木が新たに名所となっていきました。

江戸時代の鎌倉は、多くの場合は江ノ島とセットとなって、江戸からは割と気軽に行ける観光地になっていました。そのなかで名所旧跡が新しく追加されていったのです。

以上のように、我々がなんとなく認識している「古都鎌倉」というのは鎌倉時代そのままの古都ではないわけです。古都の魅力に惹かれた人々が時代ごとに付け加えてきた由緒や魅力、いわば「幻想」の集大成が今の「古都鎌倉」の実像なのです。実際、鎌倉には歴史上の人物や出来事の情報在地名やお寺、地形などに結びついているので、そこを手掛かりに想像をふくらませれば「武家の古都鎌倉」の姿が蘇ってくると思います。それは予備知識を持っていてこそできることであって、いきなり現地に行き、「武家の古都鎌倉」を理解することは難しいです。イコモスの審査の方々も理解が難しかったということは、説明が足りなかったということなのでしょう。世界遺産への道は険しいとはいえ、鎌倉には手がかり自体は随所に残っておりますので、知れば知るほど「武家の古都鎌倉」の姿というのは広がり膨らんでいくはずです。皆さんもぜひ予備知識を増やした上で鎌倉に行っていただき、豊かな「古都鎌倉」像を膨らませていただきたいと思います。

【主な質問】京都（平安京）のような計画的な町づくりという発想はありましたか？

鎌倉には都市計画はほぼなかったと思います。若宮大路は直線道路ですが、それ以外の道は、地形に合わせて曲げていくという、ある意味合理的な道の付け方をしております。できるだけ地形にあまり手を加えずに、それを利用する形で町づくりをしていったと見受けられます。